



## 聖書の読み方、楽しみ方

～解釈学の基礎を学ぶ～

講師 神戸基秀

# 目次

はじめに .....	1
解釈学について	1
<b>第1章 聖書を読むことの大切さ .....</b>	<b>2</b>
1. 体験に基づく信仰生活の限界	2
2. なぜ聖書を読むことが大切なのか	3
3. まずは聖書を読んでもみよう	9
<b>第2章 聖書を読む上で大切なこと .....</b>	<b>10</b>
1. 信仰と聖霊の導き	10
2. 著者の意図を探る	13
3. 文脈をふまえる	15
4. 結論	21

---

# はじめに

---

---

## 解釈学について

---

本セミナーのサブタイトルには、「解釈学」という難しい言葉が入っています。簡単な定義をしておくと、解釈学とは、聖書を解釈するためのルールが何かを研究する学問である<sup>1</sup>といえます。

私たちは知らず知らずのうちに、日常生活の中で「解釈」を行っています。たとえば、私たちは小説を小説として、新聞を新聞として読むことができます。これは、意識していなくても、小説の解釈の仕方や、新聞の解釈の仕方が身につけているからです。また、日常会話の中でも、冗談は冗談として理解することができます。これもまた、無意識のうちに、日常会話の解釈の仕方が身につけている証拠です。

こういった例と同じように、聖書を聖書として読んで理解するためにどのようなルールに従っていくべきかということの研究するのが、解釈学という学問です。

クリスチャンの信仰と信仰生活の土台は、聖書にあります。よって、聖書を「解釈」するということは、私たちにとって非常に重要なことです。ただし、今回は解釈学の「基礎」を学ぶと銘打っていますが、実際には、解釈学の一部を少しだけお見せする程度の内容になっています。解釈学は「基礎」だけでも、網羅しようとすれば何百ページにもなる本が一冊書けてしまうくらいなのです。

本書では、解釈学の基礎の中でも、最も重要な2つのルールをお伝えします。その2つは著者の意図を探るということと、文脈をふまえるというものです。その他にも、解釈学の基礎として重要なことはたくさんあります。（たとえば、聖書翻訳について、歴史書や詩篇などの文学的ジャンルについて、など）しかし、この2つのルールを覚えていただくだけでも、最初は十分でしょう。

---

<sup>1</sup> Charles C. Ryrie, *Basic Theology*, revised and expanded edition (Chicago: Moody, 2007), 125; Stanley J. Grenz, David Guretzki, and Cherith Fee Nordling, *Pocket Dictionary of Theological Terms* (Downers Grove, IL: InterVarsity, 1999), 59.

---

## 第1章

# 聖書を読むことの大切さ

---

### 本章のアウトライン

1. 体験に基づく信仰生活の限界
2. なぜ聖書を読むことが大切なのか
3. まずは聖書を読んでみよう

---

## 1. 体験に基づく信仰生活の限界

---

私たちは、何かの体験だけでクリスチャン生活の喜びを継続させることはできません。何か満足を感じるような体験をし続けなければ、すぐに喜びのない状態まで戻ってしまいます。それでは、「いつも喜んでいなさい」(Iテサ5:16)といった聖書のみことばを実践していくには、どうしたら良いのでしょうか。

答えは、聖書という本そのものにあります。聖書は、神がご自分について、私たちに余すことなく伝えようと与えてくださった本です。私たちはこの本から、まず学んで知ることができます。次に、学んで知ったことと、クリスチャン生活での実体験が、何重にも織りなされていくことで、神への信頼が深められ、固められていきます。そして、神への信頼が、私たちの内側に感謝や喜びを生み出すのです。

これは、聖書を読むのが大切だということの、最大の理由でもあります。

---

## 2. なぜ聖書を読むことが大切なのか

---

次に、クリスチャンにとって聖書を読むことが大切である理由を、より具体的に考えていきましょう。ここで問うべきは、私たちが聖書を読むことで、どのようなことを学んで知ることができるのかということです。聖書が教えてくれる内容の大切さがわかれば、なぜ聖書を読むことが大切なのかということも、自ずと答えが見えてくるはずです。

こうしたテーマについて考えるために、まずは他でもない聖書の本文に目を向けてみましょう。聖書の中には、聖書そのものについて教えてくれている箇所がたくさんあります。本書では、特にテモテへの手紙第二 3:13-17に注目していきます。そこには、次のように書かれています<sup>2</sup>。

13悪い者たちや詐欺師たちは、だましたり、だまされたりして、ますます悪に落ちて行きます。14けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分がだれから学んだかをしており、15また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。16聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。17神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。

(テモテへの手紙第二3:13-17)

ここからは、第二テモテの聖句について、以下のような流れで解説していきます。

1. 手紙の背景 (13-14節a)
2. テモテと聖書 (14b-15節)
3. 聖書と神の靈感 (16節a)
4. 聖書の価値 (16b-17節)
5. 学んだ内容の結論

---

<sup>2</sup> 聖書引用は、聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会による。

## 2-1. 手紙の背景 (13-14節a)

第二テモテ3:13-17は、使徒パウロが弟子のテモテに宛てて書いた手紙の一部です。この手紙を書いた時、パウロは囚人になっていて、自分の死が目前に迫っていると考えていたようです (IIテモ1:8; 2:9; 4:6)。この手紙は、愛弟子のテモテがどのように使命を果していくべきかを伝えている、いわばパウロの遺言のようなものになっています。

それでは、3:13-17が置かれている流れを確認してみましょう。まずパウロは、見かけはクリスチャンであっても神の力を否定するような人々について、テモテに警告しています。彼らは、「自分だけを愛し……神を冒瀆し……思い上がり、神よりも快樂を愛する」ような人々です (3:2-4)。さらには、このようにも言われています。「彼らの中には、家々に入り込み、愚かな女たちをたぶらかしている者たちがいます。」 (3:6a) こういった書き振りを見ると、パウロがこの手紙を書いた時点で、このような人々が実際に現れていたようです。13節の中で「悪い者たちや詐欺師たち」と言われている人々は、本当は神を冒瀆している偽クリスチャンや、偽教師のことなのです。

このような現実をふまえて、パウロはテモテに勧めます。「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。」 (3:14a) テモテが「学んで確信したところにとどまって」いれば、「悪い者たちや詐欺師たち」のような悪の道に落ちることはありません。

## 2-2. テモテと聖書 (14b-15節)

<sup>14b</sup>あなたは自分がだれから学んだかを知っており、<sup>15</sup>また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。

(テモテへの手紙第二3:14b-15)

テモテが「学んで確信したところ」は、彼が教師から教わってきたことと、「幼いころから」親しんできた「聖書」に根差しています。

テモテの教師とは誰でしょうか。14節bの「だれから」という言葉は、原語のギリシャ語では複数形になっています。ここには、テモテの師であり、手紙の著者であるパウロ自身が含まれているでしょう。パウロ以外にも、多くの信仰の先輩たちが、テモテの成長に関わっていたかもしれません。また、テモテの信仰は、彼の祖母ロイスと母ユニケから受け継いだものでもありました (IIテモ1:5)。

偽教師たちは、これまで聞いたこともないような、新しい教えを吹いて回っていました。しかし、耳新しい教えは、必ずしも正しいとは限りません。パウロは、テモテがこれまで教えられ、学んできた真理にとどまっていなさいと教えています。

何よりも、テモテがこれまで学んできた真理は「聖書」に根差したものでした。ここで言われている聖書は、テモテが幼いころから親しんできたものなので、旧約聖書のことと考えるべきでしょう。

使徒の働き16:1によれば、テモテは父親がギリシャ人で、母親がユダヤ人でした。つまり、彼の母ユニケは、キリストを信じるユダヤ人だったのです。テモテの場合、おそらくユニケから聖書を教わっていたのでしょう。

そして、ユニケは聖書を信じていたことによって、イエスこそがキリスト（メシア）であるという信仰に導かれた人でした。テモテはそのようなしっかりした信仰を持つお母さんから聖書を学びました。よって、「聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」というのは、テモテ自身も深く実感できることだったのでしょう。

クリスチャンでも、「聖書は難しくて分からない」と感じることもあるでしょう。しかし、聖書は少なくとも、私たちが「キリスト・イエスに対する信仰」によって救われるということは、はっきりと教えてくれています。あの有名なみことばを思い出しましょう。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。  
(ヨハネの福音書3:16)

「御子を信じる者が」、「永遠のいのちを持つ」。ヨハネは、はっきりとそう書いています。聖書は、何よりもまずイエス・キリストを指し示している本です。そして、私たちをこの方への信仰へ導いてくれる本です。

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。(ヨハネの福音書5:39)

私たちの「クリスチャン」という呼び名は、「キリストに従う者」とか「キリストの家族」といった意味を持っています<sup>3</sup>。キリストを第一とする私たちにとって、そのお方を指し示している聖書は、何よりも重要な本のはずです。

<sup>3</sup> Richard N. Longenecker, "Acts," in *The Expositor's Bible Commentary*, vol. 10, rev. ed., eds. Tremper Longman III and David E. Garland (Grand Rapids: Zondervan, 2007), 892.

## 2-3. 聖書と神の靈感（16節a）

<sup>16a</sup>聖書はすべて神の靈感によるもので、（テモテへの手紙第二3:16a）

パウロは16節から、信仰者にとって聖書がどれほど大切か、さらに詳しく教えてくれています。彼がまず言っているのは、「聖書はすべて神の靈感によるもの」だということです。「神の靈感による」と訳されている言葉は、ギリシャ語で「セオプニュウストス」といいます。この言葉は、直訳すると「神の息吹による」となります<sup>4</sup>。パウロはここで、「聖書はすべて神の息によって吹き出されたものです」と言っているのです。

聖書が「神の息吹による」といっても、神がある言葉を著者に直接伝えて、著者がその言葉をそのまま書き記したということではありません。「神が息を吹き込む」という表現から思い出されるのは、創世記にある人間の創造の記事です。大地のちりから形造られた人は、神がいのちの息を吹き込むことによって、生きるものとなりました（創2:7）。聖書もこれと似ています。聖書は、人間の著者が書いたものです。しかし、そこに神が関わってくださった結果、聖書は神のみことばとして正しいものになりました。そして、神のみことばとして力あるものにもなったのです。聖書が「神の息吹による」という表現は、聖書に対して神が直接関わってくださったということを強調しています。

それでは、聖書に対する神の関わりとは、どのようなものだったのでしょうか。そのヒントは、ペテロの手紙第二1:21にあります。

預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。（ペテロの手紙第二1:21）

ここで、使徒ペテロは「預言」について語っています。預言は、預言者が語ったものです。しかし、それが語られる過程で、聖霊による導きがありました。聖書に対する神の関わりも、そのようなものだったのでしょうか。

パウロがここで「聖書」と呼んでいる旧約聖書だけを見ても、そこに収められている39冊の本は、内容も、文章の調子も、表現も、バラエティに富んでいます。聖書は、明らかに人が書いた本です。同時に、聖書は神が関わってくださった本でもあります。神は、著者がご自分の意図にしたがって書くことができるように——逆に言えば、ご自分の意図から外れたことを書かないように——聖霊によってガイドしてくださったのです。

<sup>4</sup> 新改訳2017欄外注参照。



「神の靈感」とは、人間の著者たちが書く時に与えられた神の導きのことなのです。その導きがあったからこそ、著者たちが選んだ言葉や表現は、一言一句に至るまで、神の御心に沿っているといえます<sup>5</sup>。

こう考えてみると、聖書の性質は、イエス・キリストのご性質と似ています。キリストは100%神であり、100%人です。それと似て、聖書は100%神のみことばですが、同時に、100%人間による本だということもできるのです。

これまで見てきた聖書の性質は、第二テモテ本来の文脈では、旧約聖書に対して言われているものです。しかし、「聖書は神の靈感による」ことは、新約聖書にも適用することができます。新約聖書は、使徒たち自身か、使徒たちに直接影響された人々が書いた27冊の本を集めたものです。紀元1～2世紀にかけて、多くのクリスチャンが文書を残しました。教会は伝統的に、それらの文書の中でも、いま新約聖書に含まれている27冊だけが「神の靈感による」ものだと認めました。それは、この27冊だけが、旧約聖書の教えとイエス・キリストの教えに合致していたからです。

実際に、ペテロ自身は、パウロの手紙を聖書として理解していました（IIペテ3:16）。また、パウロはテモテへの手紙第一5:18で「聖書」から2箇所を引用していますが、うち1箇所はルカの福音書10:7からの引用であると考えられています。つまり、パウロが第一テモテを書いた時点で、ルカの福音書は聖書として認められていたようなのです。

初代教会のクリスチャンたちは、使徒やその弟子たちが書いた中で27冊の本だけが、旧約聖書と同じように「神の靈感によるもの」だと認めてきました。新約聖書まで与えられた私たちは、旧新約両方を「神の靈感によるもの」として受け入れることができるのです。

## 2-4. 聖書の価値（16b-17節）

16聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。17神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。（テモテへの手紙第二3:16-17）

聖書は神のみことばですから、当然、クリスチャンにとっては価値あるものです。その価値はどこにあるのかというと、「教えと戒めと矯正と義の訓練」にあるのです。ここでパウロが使っている表現を専門的に見ると、最初の「教え」と最後の「義の訓練」がセットになっています。そして、挟まれている「戒めと矯正」がセットになっています<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> John MacArthur and Richard Mayhue, eds., *Biblical Doctrine: A Systematic Summary of Bible Truth* (Wheaton, IL: Crossway, 2017), 78–79, 939; Ryrie, *Basic Theology*, 81.

<sup>6</sup> Andreas Köstenberger, “2 Timothy,” in *The Expositor’s Bible Commentary*, vol. 12, rev. ed., eds. Tremper Longman III and David E. Garland (Grand Rapids: Zondervan, 2006), 591.

## 教え と 戒め と 矯正 と 義の訓練

聖書は「教え」によって、神がお与えになった真理を伝えています。それによって私たちは、神の御心に適った方向へと「義の訓練」を施され、整えられていくのです。こうした「教え」や「義の訓練」には、間違った信仰や行いに対する警告が含まれています。これが「戒め」です。そして、戒めによって、私たちは不信仰や間違った行いに直面したとき、正しい方向へ向き直ることができます。これが「矯正」です<sup>7</sup>。

聖書によって教えられ、戒められ、矯正され、義の訓練を施された結果、人はどうなるのでしょうか。パウロは「神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となる」と言っています。「神の人」は、クリスチャンの指導者のことを言っているようです<sup>8</sup>。少なくとも、ここではテモテのことでしょう。指導者は、何よりも聖書を読み、聖書から教わることで、「すべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となる」のです。

しかし、これは指導者という役割についている人だけではなく、クリスチャン全員に適用することができると思います。なぜなら、クリスチャンはその役割に関わらず、全員が同じ聖書から「教えと戒めと矯正と義の訓練」を受けられるからです。

私たちクリスチャンには、それぞれ神から委ねられている働きがあります。そのために、私たちは何よりも聖書を読むことで整えられていきます。ある解説者が、こう語っているとおりです。「神の人は、何よりも前に、まず聖書の人である。」<sup>9</sup> 私たちのクリスチャン生活を整えられていくために重要なのは「何よりも前に、まず聖書の人」になることです。

## 2-5. 学んだ内容の結論

私たちは、聖書そのものから、また先輩のクリスチャンたちを通して伝えられた聖書のメッセージから、イエス・キリストへの信仰による救いへと導かれました。つまり、私たちの人生を変えたのは、聖書そのものなのです。そして、聖書は私たちがクリスチャンになった後も人生を変え続けてくれる、力に満ち溢れた本なのです。

<sup>7</sup> Carl R. Trueman, “The Power of the Word in the Present,” in *The Inerrant Word: Biblical, Historical, Theological, and Pastoral Perspectives*, ed. John MacArthur (Wheaton, IL: Crossway, 2016), 98.

<sup>8</sup> ドナルド・ガスリー『テモテへの手紙、テトスへの手紙』ティンデル聖書注解、村井優人訳（いのちのことば社、2006年）206-7頁。1テモ6:11参照。

<sup>9</sup> 前掲書、207頁。C. Spick, *Les Epistres Pastorales*, Etudes Bibliques, 4th ed. (Paris, 1969)からの引用。

---

### 3. まずは聖書を読んでみよう

---

聖書を読むことがいくら大切なことといえども、実際にはクリスチャンの中にも、聖書を読むのに抵抗感があるという方々がいます。そういった抵抗感の裏には、「聖書は難しい！」という思いもあるかもしれません。

確かに、聖書は難しい本です。また、聖書には「読み方」があります。最も大切なポイントは、著者の意図を探ることと、文脈をふまえることです。次の第2章では、この2つのポイントについて簡単にご説明します。

こういった読み方には、ある程度の「慣れ」が必要です。どれくらいで慣れるのかも、人によるでしょう。しかし、私たちがすぐに聖書の読み方に慣れるわけではないということは、だれよりも神ご自身をご存知のはずです。

それでも神は、私たちに聖書を読むことを勧めておられると思います。先ほど第二テモテから学んだように、聖書自体が、この本を読むようにと私たちに勧めてくれているのです。

聖書に慣れていくためにまず大切なのは、とにかく読むことです。最初のうちは大変かもしれませんが、私たちが「慣れていない」のをご存知な神は、それぞれの段階に応じて、私たちに必要なことを教えてくださるはずです。また、もし間違った読み方をしてしまったとしても、私たちが間違いに気づくことのできる段階に来た時、神ご自身がそれを教えてくださるでしょう。そういった神の導きを期待しながら、その導きにワクワクドキドキしながら、聖書を手にとって、読んでみてください。

---

## 第2章

# 聖書を読む上で大切なこと

---

### 第2章のアウトライン

1. 信仰と聖霊の導き
2. 著者の意図を探る
3. 文脈をふまえる
4. 結論

---

## 1. 信仰と聖霊の導き

---

### 1-1. 聖書を読むための大前提

本章では、実際に聖書を読む上で大切なポイントを扱っていきます。しかし、その前に、神のみことばを読み、理解し、実生活に適用していくために、何よりもまず信仰が必要なのだという大前提を確認しておきましょう。そして、私たちが聖書を読む時には、聖霊なる神が助け導いてくださるというポイントも押さえておきたいと思います。

聖書を読むためには信仰と聖霊の導きが大切だということに関して、ヒントを与えてくれているのが、使徒パウロによるコリント人への手紙第一2:10-3:2です。そこでパウロは、神が考えておられることは、神ご自身にしか分からないと言っています (2:11)。人間の場合でも、自分の考えを100%理解できるのはその人だけです。同様に、神のことは、神ご自身にしか分からないのです。

しかし、私たちは自分の考えを、言葉に出して伝えることができます。同様に、神も聖霊を通して、私たちにご自分の考えを伝えてくださいました。特に、神が聖霊を通して、人間の著者を用いてお与えになった情報（啓示）をまとめたものが、聖書です。

ただし、パウロによれば、人間は神を信じていなければ、聖霊を通して与えられた啓示を受け入れることができません。神を信じないということは、このお方を受け入れていないということであり、またこのお方に同意していないということでもあります。よって、信じない人は、聖書に書かれていることを受け入れることができません。

パウロは、第一コリント2:14で次のように言っています。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。（コリント人への手紙第一2:14）

これは、神を信じない人が、啓示の内容を知的に理解できないということではありません。ここで「理解する」と訳されている言葉は、ギリシャ語で「ギノウスコウ」です。これは、体験的に理解するというニュアンスを持っている言葉です<sup>10</sup>。すなわち、信じない人は啓示を知的には理解できるけれども、これを真理として受け入れることができないのです。そういった人々にとって、聖書の内容は「愚か」でしかない、とパウロは言っています。

私たちが、人間の目から見て「愚か」に思える神の啓示を真理として受け入れるには、神を信じる信仰と、「御霊」の助けの両方が必要なのです。

## 1-2. 聖霊の導きを求めて

幸いなことに、イエス・キリストを信じる人は、内側に聖霊が住んでくださっています（ガラ4:6; Iヨハ4:13）。主イエスは、聖霊が私たちの「助け主」と教えられました（ヨハ14:16, 26; 15:26）。その教えの文脈で一番強調されているのは、聖霊が神の真理を理解させるための「助け主」ということです（ヨハ16:12-15など）。よって、私たちが聖書から神が教えておられる真理を学ぼうとする時、聖霊が助け導いてくださるはずで

しかし、注意しておきたいことがあります。聖霊が助けてくだされば、私たちが聖書を100%正しく解釈できるというわけではありません<sup>11</sup>。クリスチャンは信じて救われ、罪赦

<sup>10</sup> W. Bauer, F. A. Danker, W. F. Arndt, and F. W. Gingrich, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 3rd ed. (Chicago: The University of Chicago Press, 2000), 199.

<sup>11</sup> Roy B. Zuck, "The Role of the Holy Spirit in Hermeneutics," *Bibliotheca Sacra* 141 (1984): 122.

されていますが、まだ罪の影響から完全には解放されていません。私たちは罪の影響が残っているために、神様のことを100%正しく理解することはできないのです。

そういった制約がある中でも、聖霊は、その時々私たちが必要な理解を得られるように導いてくださいます。聖霊の導きは、完璧な聖書理解を与えてくれるものではなくとも、私たちにとっては素晴らしい恵みであり、祝福です。

もうひとつ、注意しておきたいポイントがあります。聖霊の助けがあるといっても、自分の理性を働かせなくても良いというわけではありません。つまり、常識を無視したり、論理的に考えたりしなくて良いというわけではないのです<sup>12</sup>。

聖書に書かれてあることは、人間の著者を通して与えられた啓示です。よって、その著者の意図から外れた意味を持つことはあり得ません。聖霊が私たちの聖書理解を助けてくださるということは、聖書の著者の意図を探るプロセスを助けてくださるということでもあります。**聖書を理解するためには、聖霊の助けと、理性を働かせて著者の意図を探ることの両方が必要**なのです。

これは、非常に重要です。聖書は、神のみことばです。よって、神ご自身の助けがなければ、理解できません。同時に、聖書は人間の著者が書いたものでもあります。よって、理性を働かせて、著者の意図を探る必要もあるのです。

聖霊の導きは、私たちの心に直接与えられることがあります。しかし、他の信仰者（たとえば牧師、教師、友人など）が用いられることもあります。よって、聖霊は、クリスチャンによるメッセージ、解説書、聖書辞典などを通して働かれることもあるのです<sup>13</sup>。

聖書を読む時に聖霊の助けがあるということは、聖書を読む時に「間違っはいけない」と、おびえなくとも良いということです。もちろん、既に述べたように、聖書を読む時には理性を働かせて読むことも必要です。正しい聖書理解が得られるように心がける必要はあります。しかし、私たちが聖書を読むときにまず大切なのは、導いてくださる神に信頼して読んでいくということです。

私たちは日常生活の全ての場面で、「今」持っている知識や理解に基づいて、神に信頼して歩みます。それと同じことが、聖書を読むことにもいえるのです。

---

<sup>12</sup> Ibid., 126–27.

<sup>13</sup> Ibid., 126.

---

## 2. 著者の意図を探る

---

### 2-1. スタート地点は「著者の意図」

私たちが聖霊の導きに信頼しながら聖書を読む上で、大切な第一のポイントは著者の意図を探るということです。

クリスチャンの中には、信仰を持っているし聖霊も導いてくださるのだから、聖書は好きなように読めば良いのではないかと考えている方も多いです。しかし、自分の好きなように読むという「主観的」な読み方は、神から見て間違っただけで正当化してしまう危険性があります。クリスチャン生活全体を考えてみても、クリスチャンだからといって、好き放題に生きて良いということにはなりません。なぜなら、私たちには罪の性質が残っているからです。それと同様に、クリスチャンだからといって、好き放題に聖書を読んでいいということにはならないはずで

こういった考え方に対して、「主観的な読み方でも祝福された経験があるのだから、それでいいじゃないか」と反論されることがあります。確かに、主観的に聖書を読んだとしても、神はその時、その読み方をも用いられることがあり得るでしょう。

しかし、そうだとすれば、聖書の「正しい意味」は、もっと豊かに用いられるということになるでしょう。だからこそ、私たちは正しい意味を求めて、謙遜な姿勢で聖書を読むように心がけるべきです。大切なのは、自分の考えを聖書に押し付けず、「聖書そのものに語ってもらう」ということです<sup>14</sup>。

聖書そのものに語ってもらうということを別の言い方に置き換えてみると、「著者の意図を探る」ということになります。神は、人間の著者が書いたものを用いて、みことばを語られました。つまり、聖書は人間の著者が書いたものです。よって、聖書のテキストは、その著者が込めた意味、また当時の読者／聞き手が受け取った意味以外を意味することはあり得ません<sup>15</sup>。言い換えれば、聖書のことばを最初に語った／書いた人が込めた意味こそが、神が元々意図された意味でもあるのです<sup>16</sup>。よって、私たちが聖書を読むときには、元々の著者の意図を探っていくことこそが「スタート地点」だといえます<sup>17</sup>。

---

<sup>14</sup> Lindsay Olesberg, *The Bible Study Handbook: A Comprehensive Guide to an Essential Practice* (Downers Grove, IL: InterVarsity, 2012), 35.

<sup>15</sup> ゴードン・D・フィー、ダグラス・スチュワート『聖書を正しく読むために [総論] —聖書解釈学入門』和光信一訳、関野祐二監修 (いのちのことば社、2014年) 46頁。

<sup>16</sup> 同上。

<sup>17</sup> 同上。

著者の意図を無視して「聖書のことばが今の自分にとってどんな意味を持っているのだろう」ということだけを考えて読むのは、自分の考えを聖書に押し付けて読むことになってしまいます。厳しい言い方をすれば、神は元々の著者を用いられたのですから、元々の著者よりも自分を上に置くということは、神よりも自分を上に置くことと同じなのです。

## 2-2. 文章の「行間」よりも「内容」を

ただし、「著者の意図を探る」ことに関して、注意すべきポイントがあります。著者の意図を探るということは、著者の心の状態（心理）を探ることと、必ずしもイコールではありません<sup>18</sup>。私たちが聖書を読む時に心がけるべきは、著者の「心」ではなくて、著者が伝えようとしていることの「内容」を追いかけることです。

それでは、著者の「心」を探ることと、著者が書いた「内容」を探ることは、何が違うのでしょうか。たとえば、高校の現代文でよくある試験問題を2つ例に挙げてみましょう。

1. このときの【登場人物／作者】の気持ちを表したものとして最も適当なものを次の中から選びなさい。
2. 「～～～」【という文章】から、【登場人物／作者】の考えとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

1番目の問題の場合は、文章の「行間」を読んで、登場人物／作者の心の状態を探ることが求められています。しかし、2番目の問題の場合には、言葉の意味を、前後の流れをふまえて注意深く考えることが求められています。聖書を読む時には、まず2番目の問題の読み方を心がけるようにしましょう。

著者の心の状態は、必ずしも本文の中には書かれていません。一方で、著者が伝えようとしている内容は、必ず本文の中に書かれてあるはずですが、また、著者があることを伝える「目的」の場合には、目の前の本文に書かれていないとしても、全体の流れをふまえれば、自ずと見えてくるものです。つまり、著者が伝えようとしている内容と、それを伝える目的は、本文をよく読めば分かるものなのです。

聖書を読む時も同じです。著者の心の状態は、必ずしも書かれてはいません。しかし、著者が伝えようとしている内容は書かれてあります。著者の目的も、内容から考えることができます。私たちは、まずは聖書本文の「行間」よりも「内容」に集中すべきです。

そこで、著者が言葉に込めた意味を探るときに大切になってくるのが、次ページから扱う文脈になります。

---

<sup>18</sup> Cf. Walter C. Kaiser, Jr., "The Meaning of Meaning," chapter 2 in *Introduction to Biblical Hermeneutics: The Search for Meaning*, by Walter C. Kaiser, Jr. and Moisés Silva, rev. and exp. ed. (Grand Rapids: Zondervan, 2007), 38–42.



---

## 3. 文脈をふまえる

---

### 3-1. 文脈の大切さ

私たちが可能な限り聖書の著者の意図を探る上で大切なのが、文脈をふまえることです。文脈とは「個々の言葉や文章の繋がり・結びつき」です。その結びつきによって、個々の言葉や文章の意味が決められます。そして、著者の意図、つまり著者が伝えようとしている内容が明らかになるのです。

たとえば、ある人が「雨が降ってきた」と言ったとしましょう<sup>19</sup>。これだけだと、その人が残念がって言った言葉なのか、喜んで言った言葉なのかは分かりません。しかし、前の文脈で、その人がその日テーマパークに行こうとしていたと書いてあれば、「雨が降ってきた」は残念がっている言葉だと分かります。

文脈をふまえないと捉え方を誤ってしまう例は、もちろん聖書にもあります。

イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」  
(ヨハネの福音書11:11)

イエスの「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました」という言葉は、ラザロが死んだという文脈をキャッチしておかないと、次の12節に出て来る弟子たちのように「眠っているのなら、助かるでしょう」と誤解してしまいます。文脈をふまえることで、13節に書いてあるとおり、イエスが「ラザロの死を言われた」と分かるのです。

また、聖書には、文脈をふまえないと全く意味が分からないという例もあります。

山々は雄羊のように  
丘は子牛のように跳ね回った。(詩篇114:4)

---

<sup>19</sup> Olesberg, *The Bible Study Handbook*, 120. N. T. Wright, *Jesus and Victory of God* (Minneapolis: Fortress Press, 1996), 198からの引用。

これだけでは、どのような状況が歌われているのか、意味不明です。しかし、この短い詩篇全体を見ると、出エジプトの後、イスラエルがシナイ山に導かれて、そこで神の栄光が現れた時のことを歌っているのだと分かります<sup>20</sup>。

私たちは注意して文脈をキャッチしないと、聖書の著者の意図から簡単に外れてしまいます。これは、ほとんどの聖句に当てはまるといっても過言ではありません。

## 3-2. 文脈をふまえて読んでみよう

文脈には様々な種類がありますが、本書でお伝えしたいのは以下の3種類の文脈です。

1. 対象聖句の直近の文脈
2. 対象聖句がある書物全体の文脈
3. 対象聖句の背景にある歴史的・文化的文脈

ここからは、実際の聖句を、3つの文脈をふまえて読んでみましょう。取り扱うのはヨハネの手紙第一2:27です。

しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。（ヨハネの手紙第一2:27）

### 文脈を無視した間違った解釈

上記の引用で、アンダーラインが引いてあるところに注目してください。まず「注ぎの油」については、手紙全体の文脈から、聖霊のことだと分かります（後に見ていきます）。

それをふまえた上で、次のアンダーラインが引いてあるところを見てください。この部分を取って、以下のような間違った解釈がされることがあります。

- 聖霊がすべてを教えてくれるのだから、聖書を読む時に他人の助けは不要である。よって、教師も解説書も必要ない。
- 聖霊がすべてを教えてくれるのだから、聖書は細かいことに捕らわれず、自由に読めば良い。

<sup>20</sup> フィー、スチュワート『聖書を正しく読む為に』337頁。

しかし、3つの文脈（直近の文脈、手紙全体の文脈、歴史的な文脈）を意識して著者（ヨハネ）の意図を探っていくと、上記の2つの解釈は間違っていることが分かります。

## 直近の文脈

この聖句は「しかし、あなたがたのうちには」と始まっています。手紙の読者である「あなたがた」と、他の誰かが比べられているようです。ヨハネは、読者と誰を比べているのでしょうか。

直近の文脈を調べる時に便利なのが、翻訳聖書の段落分けです。段落分けは聖書の原文ではなく、翻訳者が決めたものです。必ずしも正しいものとは限りませんが、大いに参考になります。聖書を読むことに慣れてきて、自分で段落分けを考えるようなステップへ進むまでは、お手持ちの聖書の段落分けをある程度信頼していただいて良いでしょう。

本書が参照している「新改訳2017」では、2章26節と27節がひとつの段落となっています。26節では次のように言われています。

私はあなたがたを惑わす者たちについて、以上のことを書いてきました。  
（ヨハネの手紙第一2:26）

ここによれば、27節では読者と、読者を「惑わす者たち」が比べられているということになります。では、「惑わす者たち」とは、具体的に誰のことなのでしょう。

一つ前の段落は、18節から25節までです。その段落からは、ある人々が「私たちの中から出て行」った、つまり読者のいる教会から離れて行ったということが分かります（19節）。離れて行った人々は「多くの反キリスト」とも呼ばれています（18節）。「反キリスト」という用語の意味について、ここではこれ以上踏み込みませんが、キリストに反対する人々のことであろうと想像できます。

続いて、読者たちは離れて行った人々と違って、「聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています」と言われています（20節）。ここで、27節と同じ「注ぎの油」が出て来たことに注目しておきましょう。（これが何を指しているかは、後に「全体の文脈」で考えます。）

「惑わす者たち」とはどのような人々なのかを知るために決定的なのが、22節です。

偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくでたれでしょう。御父と御子を否定する者、それが反キリストです。（ヨハネの手紙第一2:22）

ここで、答えが出ました。ヨハネが言っている「多くの反キリスト」、「偽り者」、そして読者を「惑わす者たち」とは、「イエスがキリストであることを否定する」人々なのです。

18節からの文脈でテーマになっているのは、「偽り者」には惑わされず、「イエスがキリストである」という信仰に留まり続けなさいということです。よって、27節も、「惑わされるな」というテーマの中で理解する必要があります。ヨハネが27節で伝えようとしているのは、本当はイエスを信じていないような偽り者から「教えてもらう必要はありません」ということです。ここは、聖書を読む時に教師の助けは必要ないとか、好きなように読めば良いと保証している聖句ではないのです。

## 全体の文脈

今度は手紙の「全体の文脈」を見ることで、27節の意味をもっとはっきりさせておきましょう。まず問題なのは、「注ぎの油」とは何かということです。20節では、「注ぎの油」が「聖なる方」、つまり神から与えられたものだと言われていました。この「注ぎの油」が、イエスはキリストであるという真理を教えてくれるのです。

手紙を読み進めていくと、次のように言われています。

神の命令を守る者は神のうちにとどまり、神もまた、その人のうちにとどまります。神が私たちのうちにとどまっておられることは、神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります。（ヨハネの手紙第一3:24）

神が私たちに御霊を与えてくださったことによって、私たちが神のうちにとどまり、神も私たちのうちにとどまっておられることが分かります。（ヨハネの手紙第一4:13）

2:27の結論は、「あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい」というものでした。今確認した他の箇所では、神のうちにとどまることを教えてくれるのは「御霊」、つまり聖霊です。よって、2:20, 27の「注ぎの油」は聖霊であると結論づけることができるのです。

次に、手紙全体から、ヨハネがこの手紙を書いた目的を探ってみましょう。2:18-27では、読者と、読者を惑わす「偽り者」が比べられていました。そして、あなたがたは偽り者のようであってはならないというのが、ヨハネから読者へのメッセージでした。

手紙を最初から読むと、1-2章では、ヨハネが様々な考え方や態度を批判していることが分かります。

- 1:8 自分たちに「罪がない」という考え方
- 1:10 「罪を犯したことがない」という考え方
- 2:4 「神を知っていると言いながら、その命令を守っていない」という態度
- 2:9 「光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎んでいる」という態度

ヨハネはこういった考え方や態度を批判しながら、読者たちに「あなたがたはこうでありなさい」と教えていきます。その流れの中で、2:18以降「あなたがたはあの偽り者たちのようであってははいけません」と教えられていきます。すなわち、ヨハネはこの手紙全体を、偽り者たちへの批判と、読者への「あなたがたはこうでありなさい」というメッセージに費やしているようなのです。

先に観察した2:18-27から、偽り者たちは、イエスがキリストであると信じていなかったことが分かります。そして、1-2章からは、偽り者たちが道徳的に墮落していたことも想像できます。この手紙を通して読むと、読者に対する道徳的教えと、イエスが神の子だという信仰に留まり続けなさいという信仰の勧めの繰り返しになっています。手紙の最後に当たる5章でも、「イエスを神の子と信じる」という信仰が最も強調されています。

つまり、ヨハネが手紙全体を通して伝えようとしているのは、こういうメッセージです。

あなたがたは、イエスを神の子と信じる信仰にとどまる人々なのだから、イエスのように神のことばを守りなさい。イエスを信じず、神の言葉も守らないあの偽り者たちのようであってははいけません。

第一ヨハネ2:27は、このような大きな流れの中で理解する必要があります。

## 歴史的・文化的文脈

最後に取り上げる「歴史的・文化的文脈」は、聖書だけでは分からないことが多いです。この文脈をキャッチするには、聖書辞典や注解書（解説書）などの助けが非常に有効です。たとえば、注解書の「イントロダクション（緒論）」の部分はとても参考になります。そこで情報を得て、気になるキーワードを聖書辞典で調べるという方法が良いでしょう。

ここでは、手紙の背後にいた「偽り者」について、歴史的背景から何か分かることがあるのか、調査してみましょう。たとえば、『新実用聖書注解』から「ヨハネの手紙」の「緒論」を開いてみます。次のように書かれています。

これらの3通の手紙を受け取る人々、及びその属する諸教会に共通している背景並びに問題点は、おもにギリシヤ思想から派生したグノーシス主義的な偽りの教えが、当時の諸教会に強い影響を及ぼしつつあったことである。

第1の手紙では、彼らが「イエスがキリストであることを否定」(2:22)して、受肉したキリストを告白しない(4:2-3)「反キリスト」(2:22, 4:3)であり、「にせ預言者」(4:1)であるとしている。[中略]

そのように手厳しく糾弾されているグノーシス主義の教えの根本は、霊のみを善とし、肉や物質を悪と見なす霊肉二元論にある。この視点でキリスト教を見ると、神は善であるから悪である物質や肉体と結び付くはずはないとして、神の子の受肉を否定する結果となり、キリスト教の根本を揺がすことになる。実際生活の面で見ると、結局肉は悪だから、どのような不道徳を行ったとしても、別に問題にはならないとして、放縦な生活を容認することとなる。<sup>21</sup>

ここで、「グノーシス主義」という言葉が出て来るところにアンダーラインを引きました。聖書辞典で「グノーシス主義」を調べても、やはり下線部と似たようなことが書かれています。

さらに、他の注解書を参照すると、紀元2世紀のクリスチャンの著作で、ヨハネが手紙を執筆した当時いたエペソに「ケリントス」という異端の人物が存在していたと書かれています。この人物は、イエスは善良だがただの人間であり、バプテスマのヨハネから洗礼を受けた時、キリストが鳩の形を取ってイエスに下り、そこからイエスが特別な力を得ていたと考えていたようです<sup>22</sup>。学者たちは、このケリントスなる人物の思想が、きわめて初期のグノーシス主義といえるだろうと結論づけています<sup>24</sup>。

以上のような調査から分かるのは、ヨハネが手紙を書いた時代、実際にイエスが神の子であることを否定し、道徳的にも墮落していた人々が、教会の中で現れ始めていたのだらうということです。また、そういった人々によって、クリスチャンたちは大いに惑わされていたようでもあります。

こういった歴史的背景が分かると、手紙だけを読んで分かっていたことが、より鮮明に見えてきます。また、ヨハネがどういう状況下で手紙を書いたのか、より立体的に見えてくるでしょう。ヨハネは、実際に当時現れていた異端の教えによって惑わされつつある教会を励まし、「使徒である自分が教えてきた信仰に留まりなさい」と伝えるために、この手紙を書いたのです。

---

<sup>21</sup> 村上宣道「ヨハネの手紙」『新実用聖書注解』宇田進・富井悠夫・宮村武夫共編(いのちのことば社、2008年)1823-24頁。下線部=引用者。

<sup>22</sup> ジョン・R・W・ストット『ヨハネの手紙』ティンデル聖書注解、千田俊昭訳(いのちのことば社、2007年)50頁。

<sup>23</sup> エイレナイオス『異端反駁』1.26.1

<sup>24</sup> 大貫隆『グノーシスの神話』(講談社、2014年)44頁。

---

## 4. 結論

---

この第2章でお伝えしてきたことは、時にはかなり難しく感じることもあったかもしれませんが、また、曖昧になってしまった部分が多いのは、筆者の力不足であり、大変申し訳ない限りです。

最後に、皆さんに考えていただきたいことがあります。聖書といえども本ですから、「著者の意図を探る」こと、また「文脈をふまえて読む」ことが必要なのは、当然のはずですが。それなのに難しいと感じてしまうということは、ひとつには、私たちがそれだけ自分の考えを聖書に押し付けてしまっているということもあるのではないのでしょうか。

私たちが自分ではなく聖書に語ってもらう読み方をするには、日々それを意識して、慣れていく必要があります。これは地道な作業ですが、神のみことばから豊かに学ぶための、霊的な鍛練でもあると思っただきたいのです。

今日のデボーション箇所でもいいですし、通読箇所でもいいです。まずは試しに、特に「直近の文脈」を意識して、「著者の意図を探る」という読み方を続けてみてください。そして、慣れてきたら、「書物全体の文脈」を意識することにチャレンジしてみると良いと思います。最初のうちは苦しいかもしれませんが、神様はその学びを豊かに祝福してくださるでしょう。